５.椋ノ木遺跡第８次発掘調査報告

１．はじめに

椋ノ木遺跡は、木津川左岸の自然堤防上に位置する縄文時代～中世にかけての複合集落遺跡である。現在の行政区画の上では、相楽郡精華町下狛小字椋ノ木ほかに所在している（第１図）。この一帯は、近世の絵図や古地図などによれば、南北に狭長な微高地が畑などに利用されていたことが見てとれる。現在、木津川上流浄化センターなどの敷地内および水田となっている遺跡の北側には、中世以来の集落が点在する景観を今にとどめている。

平成７年度以来、７次にわたる調査によって縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の大溝、古墳時代前期の竪穴式住居跡、後期の古墳、平安時代末～鎌倉時代の建物跡のほか、条里制地割に由来する坪境溝や耕作溝群などが確認されている。なかでも平安時代末～鎌倉時代の遺構や遺物は広い範囲で確認されており、大規模な集落を形成していたことがうかがえ、当時の木津川の舟運に関連する集落であったと考えられている。今回の調査地は、遺跡範囲内の南東部に位置し、今回で８度目の調査となる（第２図）。

今回の調査は、京都府流域下水道事務所の依頼を受け、平成21年度木津川上流流域下水道木津川上流浄化センター建設工事に係る発掘調査として、汚泥浄化タンク建設予定地であるＡトレンチと汚泥濃縮棟建設予定地であるＢトレンチの２か所にトレンチを設定し実施した。

現地調査および整理報告にあたっては、京都府教育委員会ならびに精華町教育委員会をはじめ、関係諸機関には多大なご協力を得た。また、調査には多くの方々に参加いただいた。記して謝意を表したい。本報告は村田が執筆した。

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸
調 査 担 当 者　調査第２課主幹調査第３係長事務取扱　石井清司
同　専門調査員　竹井治雄
同　調査員　村田和弘
調　査　場　所　相楽郡精華町下狛小字椋ノ木ほか
現地調査期間　平成21年11月26日～平成22年３月４日
調　査　面　積　500㎡

２．位置と環境

椋ノ木遺跡が所在する精華町は、京都府南部の木津川左岸に位置し、北は京田辺市、東・南は木津川市に隣接する。精華町は、現在水田として土地利用されている木津川氾濫原と近年、関西文化学術研究都市として開発されている精華台・光台などの丘陵部、小河川が形成した扇状地部

1．江津遺跡	2．宮津古墳	3．屋敷田遺跡	4．宮の口古墳群	5．白山遺跡
6．桑町遺跡	7．宮の口遺跡	8．山路遺跡	9．元屋敷遺跡	10．平谷古墳群
11．薬師山遺跡	12．西ノ口遺跡	13．前川原遺跡	14．百久保地先遺跡	15．長芝遺跡
16．鞍岡神社遺跡	17．鞍岡山遺跡	18．下狛廃寺	19．拝殿遺跡	20．石ヶ町遺跡
21．鞍岡山古墳群	22．下馬遺跡	23．片山遺跡	24．里廃寺	25．里遺跡
26．椋ノ木遺跡	27．石塚古墳	28．城山古墳	29．城山遺跡	30．柿添遺跡
31．北稲遺跡	32．西垣戸遺跡	33．中垣外遺跡	34．北尻遺跡	35．南稲遺跡
36．丸山古墳	37．祝園古墳	38．渋川東遺跡	39．渋川西遺跡	40．蟹満寺
41．山際古墳	42．西ノ口遺跡	43．山ノ上古墳	44．湧出宮遺跡	45．丹夕遺跡
46．三所塚古墳	47．恭仁京右京推定地	48．平尾城山古墳	49．稲荷山古墳	50．北谷横穴群
51．今城跡	52．西ヶ峰古墳	53．坂ノ下遺跡	54．椿井大塚山古墳	

第１図　調査地周辺遺跡分布図（国土地理院 S＝1/25,000 田辺）

によって形成される。地形は西方から東方に向かって緩やかに傾斜している。椋ノ木遺跡は、木津川氾濫原の自然堤防上に営まれた集落である。

周辺の遺跡として、縄文時代では、木津川市の恭仁宮下層（例幣遺跡）で前期の竪穴式住居跡が検出されているほか、木津川右岸に位置する木津川市椿井大塚山古墳下層や湧出宮遺跡などの丘陵部で後・晩期の縄文土器の出土が知られている。こうした丘陵部の遺跡に対して、椋ノ木遺跡は低地部にあり、中期～晩期の遺物が出土している。木津川の氾濫原に縄文遺跡が立地している例として注目される。

弥生時代の遺跡では、精華町畑ノ前遺跡で中期中葉の集落跡が検出されている。後期では、椋ノ木遺跡で大溝が検出されているほか、木津川右岸の木津川市上狛西遺跡で竪穴式住居跡が検出されている。丘陵部に立地する椿井遺跡は後期の高地性集落であることが確認されている。

古墳時代には、木津川右岸の丘陵上に、全長175mの椿井大塚山古墳のほか、全長110mの平尾城山古墳がある。中期～末にかけては、椋ノ木遺跡においても古墳の存在が確認されているが、同時期の大規模集落として、森垣外遺跡があげられる。森垣外遺跡では大壁住居や陶質土器など朝鮮半島系の遺構や遺物が出土しており、注目される遺跡である。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、西方約500mに里廃寺があり、版築瓦積基壇が検出され、高麗寺式軒丸瓦が出土しており、渡来系の狛氏によって建立された可能性が高いとされている。

中世になると、低地部の椋ノ木遺跡への居住が始まるが、過去の調査によって、12世紀中葉以降に大型の掘立柱建物が構築されるようになり、大規模集落に発展していくことが明らかになっている。本遺跡の北側には、石仏や五輪塔、宝篋印塔が出土した百久保地先遺跡があり、椋ノ木遺跡の集落の墓域と考えられている。中世のはじめごろには、この地域でも荘園開発が次々と行われるようになり、荘園などをめぐって石清水八幡宮・興福寺・東大寺など寺社権門が抗争を始めるようになる。それらを背景として、後半になると、椋ノ木遺跡では集落の中枢地区が南に移動し、集落内に大きな変化を与えたと考えられている。

３．調査の経過

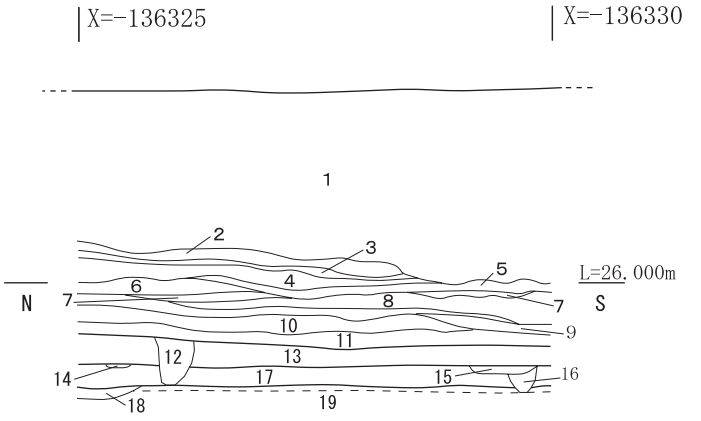
今回の調査地は２か所に分かれ、東側の汚泥浄化タンク建設予定地をＡトレンチ、西側の汚泥濃縮棟建設予定地をＢトレンチとした調査区を設定した。各遺構面ごとに重機による掘削を行い、遺構面直上からは人力で作業を行い、遺構の検出に努めた。

Ａトレンチは、平成13年度の第５次調査地の北東側に位置する。今回の調査区内においても、３面の遺構面の調査を実施した。トレンチの西側と南側は、後世の人為的な掘削に伴い遺構が消滅していた。西側の攪乱は、南側に比べると浅く、第１遺構面より約10cm攪乱土を除去すると土坑やピットなどの遺構の底部が一部残っていた。南側は、1.5mまで断ち割りの掘削を行ったが、さらに下層まで攪乱がおよんでいることを確認した。

Ｂトレンチは、平成16年度の第７次調査地の西隣に位置する。平成16年度の調査（第７次）の成果から、２面の遺構面が存在することが確認されている。第１面は中世（平安時代末～鎌倉時代）

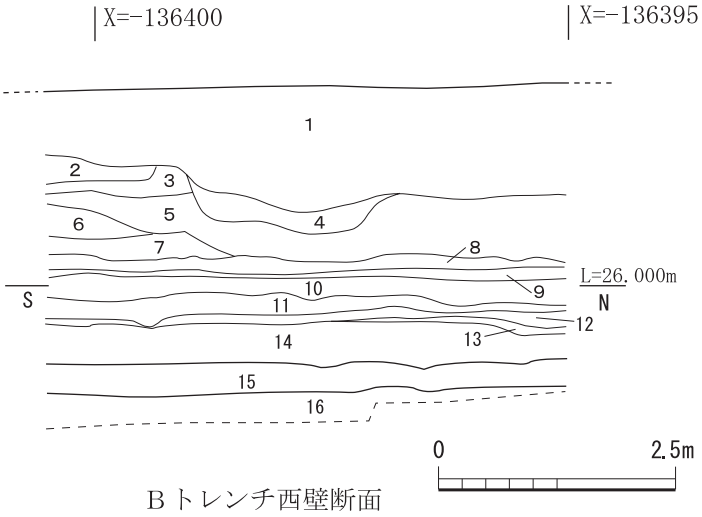
＊座標は日本測地系を使用

第２図　椋ノ木遺跡調査区配置図



Ａトレンチ東壁断面

１．造成盛り土
２．暗灰緑色砂（洪水砂堆積）
３．暗茶褐色砂（洪水砂堆積）
４．茶褐色砂（洪水砂堆積）
５．淡黄灰色砂（洪水砂堆積）
６．淡青灰色砂（洪水砂堆積）
７．暗青灰色砂（洪水砂堆積）
８．暗茶灰色粘性砂質土
９．暗茶褐色粘質土
10．暗青灰色粘質土
11．暗茶灰色粘質土（遺物包含層）
12．淡灰褐色粘質土（ピットP101）
13．明赤褐色粘質土（第１遺構面）
14．灰褐色粘質土
15．暗灰褐色粘質土
16．灰褐色粘質土（ピットP90）
17．淡緑灰色粘質土（第２遺構面）
18．淡黄灰色粘質土（土坑ＳＫ96）
19．淡黄褐色粘質土（第３遺構面）



Ｂトレンチ西壁断面

１．造成盛り土
２．暗灰褐色粘質土
３．暗褐色粘質土（現代攪乱）
４．暗灰色粘質土
５．茶褐色粘質土
６．淡褐色粘質土
７．黒灰色粘質土
８．淡青褐色砂質土
９．淡青灰色砂
10．淡青灰色砂
11．淡灰褐色砂質土
12．暗青灰色粘質土
13．茶褐色粘質土（遺物包含層）
14．暗茶灰色粘質土
15．暗緑灰色粘質土（第１遺構面）
16．明黄褐色粘質土（第２遺構面）

第３図　Ａ・Ｂトレンチ土層断面図

の遺構面、第２面は縄文時代の遺構面となる。今回の調査でも２面の遺構面を想定して調査を進めた。

４．検出遺構

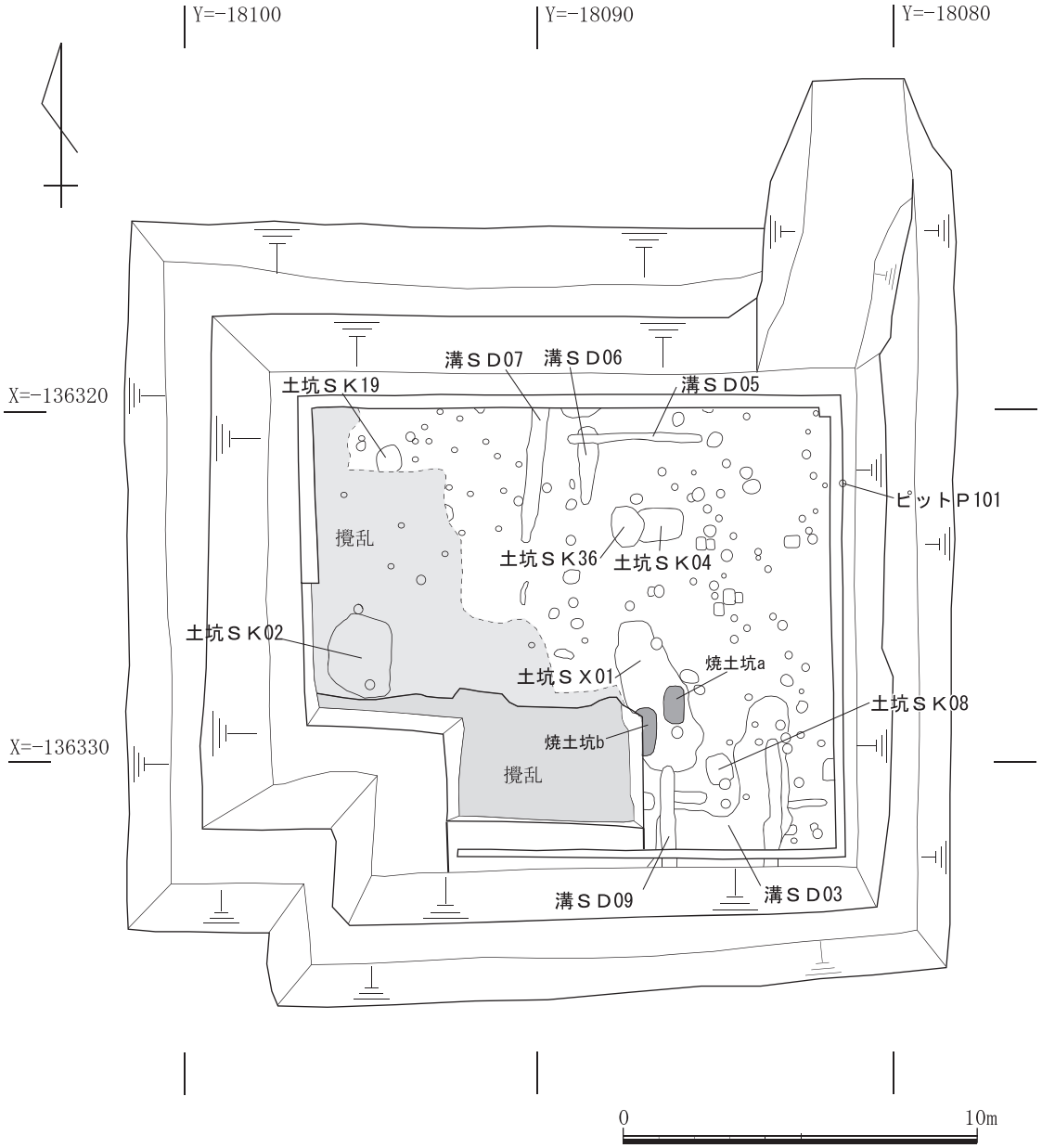
１）Ａトレンチ

近接調査地である平成13年度の第５次調査の成果から、３面の遺構面が存在することが確認されている。

①第１遺構面

標高約25.5mで第１面となる中世(鎌倉時代以降)の遺構面を確認した。遺構は、耕作溝と考えられる溝や土坑、ピットなどを検出した。検出した遺構の時期としては13世紀～14世紀初めに該当すると判断される。

土坑ＳＸ01　東西幅約1.8m、南北の長さ約4.5m、深さ約0.15mを測る土坑である。また、土

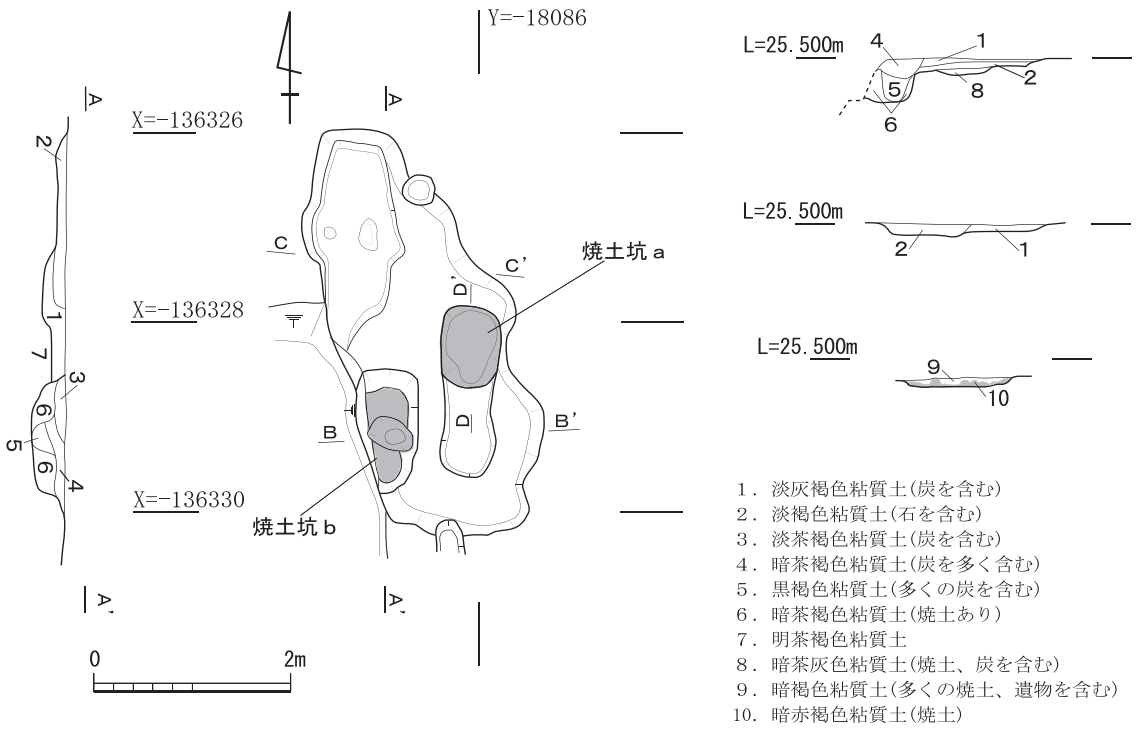


第４図　Ａトレンチ第１遺構面平面図

坑内に楕円形を呈する焼土坑（ａ・ｂ）を２基検出した。土坑ＳＸ01の埋土内から瓦器椀や土師器皿、羽釜などの土器類が出土した。同じ埋土から、焼け土や炭化物、鉄滓、フイゴの羽口、石鍋が出土したことから、鍛冶に関連する遺構と考えられる。焼土坑ａは東西幅約0.6m、南北の長さ約1.3m、深さ約0.15mを測る。埋土内からは土師器や瓦器の破片や焼け土、炭化物などが出土した。焼土坑ｂの東西幅は撹乱により破壊されているため現存する幅は約0.5m、南北の長さ約1.3m、深さ約0.2mを測る。埋土内からは土師器や瓦器の破片や焼け土、炭化物などが出土した。時期は13世紀中葉のものと判断される遺物が出土している。

土坑ＳＫ02　東西約1.8m、南北約2.3m、深さ約0.3mを測る長方形を呈する土坑である。底部には10～20cm程の石が集積していた。埋土内から土師器や瓦器、青磁などの破片が出土した。

溝ＳＤ03　トレンチ南東部で検出した屈曲する溝で、幅約1.4m、南北の長さ約4.2m、深さ約0.3



第５図　Ａトレンチ第１遺構面土坑ＳＸ01平・断面図

ｍを測る。埋土から瓦器片や土師器片、東播系の鉢の破片などが出土した。このほかに、フイゴの羽口の破片が出土していることから、この溝は土坑ＳＸ01と同時期のものかそれ以降の遺構の可能性が高い。

土坑ＳＫ04　東西約1.4m、南北約１ｍ、深さ約0.1ｍを測る。埋土からは土師器や瓦器の小片が少量出土したが、時期の判別はできなかった。

溝ＳＤ05　幅約0.1m、東西の長さ約3.8m、深さ約0.05ｍを測る耕作溝と考えられる。埋土からは瓦器の破片が少量出土した。

溝ＳＤ06　東西方向の溝ＳＤ05に切り込まれた南北方向の溝である。幅約0.5m、南北の長さ約2.2m、深さ約0.1ｍを測る。埋土からは瓦器の破片が少量出土した。

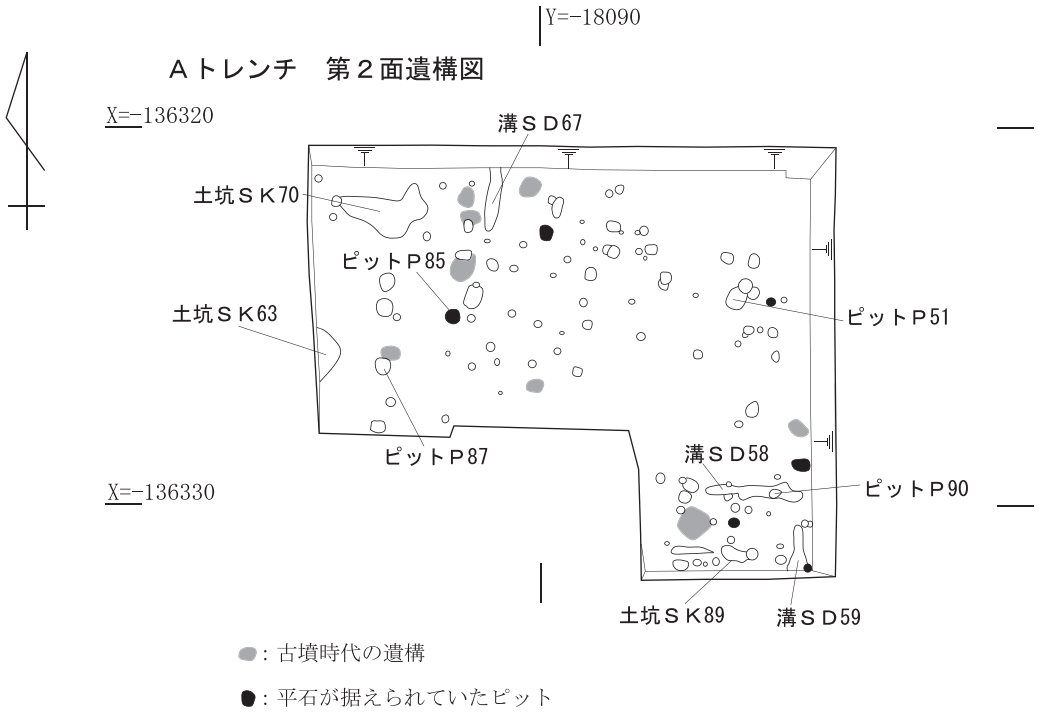
溝ＳＤ07　幅約0.5m、南北の長さ約3.8m、深さ約0.2ｍを測る。埋土からは土師器や瓦器の小片が少量出土した。

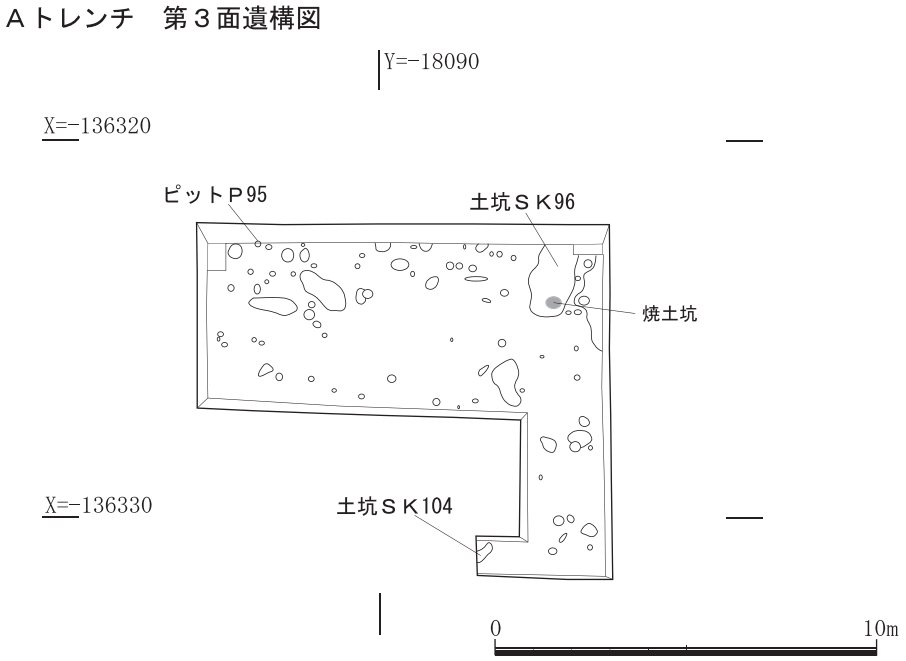
土坑ＳＫ08　東西約0.7m、南北約0.8ｍを測る隅丸方形を呈する土坑である。埋土からは土師器や瓦器の小片が少量出土した。

溝ＳＤ09　幅約0.4m、南北の長さ約2.4m、深さ約0.2ｍを測る溝で、土坑ＳＸ01を切りこんでいることから、土坑ＳＸ01より新しい時期の遺構と判断できる。埋土からは土師器や瓦器の小片が少量出土した。

土坑ＳＫ19　東西約0.5m、南北約0.8m、深さ約0.1ｍを測る土坑であるが、南側が攪乱によって破壊されているため、詳細な規模は不明である。また、遺物も出土していない。

土坑ＳＫ36　東西0.9m、南北1.1m、深さ約0.2ｍを測る楕円形を呈する土坑である。埋土からは、土師器の羽釜の破片や瓦器の破片が出土している。





第６図　Ａトレンチ第２・３遺構面平面図

ピットＰ101　直径0.4m、深さ約0.6mを測る小穴で、底部からは土師器小皿３点と瓦器椀３点が出土している。

②第２遺構面

第１遺構面から約30cm下げた標高約25.2mで、遺構を確認した。これまでの調査では、第２遺構面は古墳時代の遺構が存在する面であると確認されていたが、今回の調査地の第２遺構面では古墳時代と思われる土坑などの遺構と12世紀末～13世紀中葉までのピット群や溝を検出した。

今回の調査では、第２遺構面では２時期の遺構を検出することとなった。

検出したピット群は、素掘りのものと柱穴の底部に平たい礎板状の石を据えたものがみられる。しかし、石がある柱穴は揃わずに建物を復原するには至らなかった。

古墳時代の遺構と判断される遺構は少なく、中世の溝やピットなどの埋土である淡灰色粘質土とは異なる淡緑灰色粘質土の埋土である土坑を８基検出した。遺物は出土していないが、おそらくは古墳時代の遺構の可能性が考えられる。そのほかの遺構は、おおむね12世紀末～ 13世紀中葉までの時期に属するものと思われる。

ピットＰ51　一辺が約0.5m、深さ約0.15mを測る隅丸方形を呈する小穴である。

溝ＳＤ58　幅約0.3m、東西の長さ約2.6m、深さ約0.1mを測る東西溝である。埋土からは瓦器椀の破片が出土した。

溝ＳＤ59　幅約0.3m、南北の長さ約２m、深さ約0.2mを測る南北溝である。埋土からは土師器の破片が出土した。

土坑ＳＫ63　トレンチの西端部で検出した一辺が約１mを測る土坑であるが、調査区外に延びているものと思われる。深さは約0.15mで、埋土からは土師器や瓦器の破片が出土した。

溝ＳＤ67　幅約0.3m、南北の長さ約1.5m、深さ約0.1mを測る南北方向の溝である。埋土からは土師器や瓦器の破片が出土した。

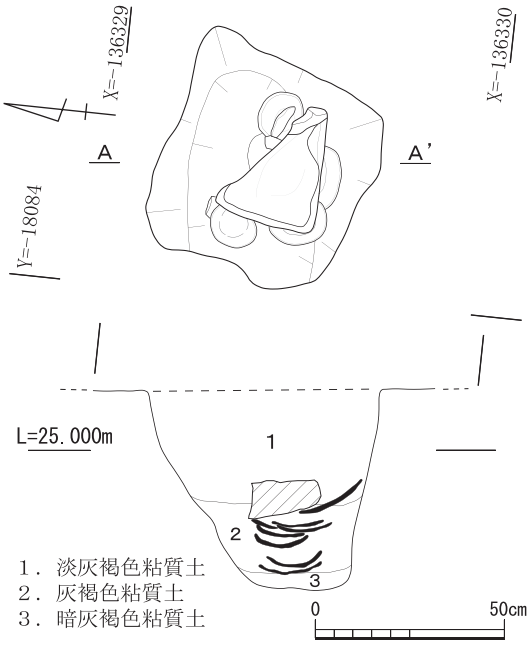
土坑ＳＫ70　東西最大約2.2m、南北最大約１m、深さ約0.05mを測る不定形な土坑である。埋土からは瓦器椀と思われる破片が出土した。

ピットＰ85　東西約0.4m、南北約0.35m、深さ約0.2mを測る穴である。底部には平石が据えられていた。埋土からは瓦器の小片が出土した。

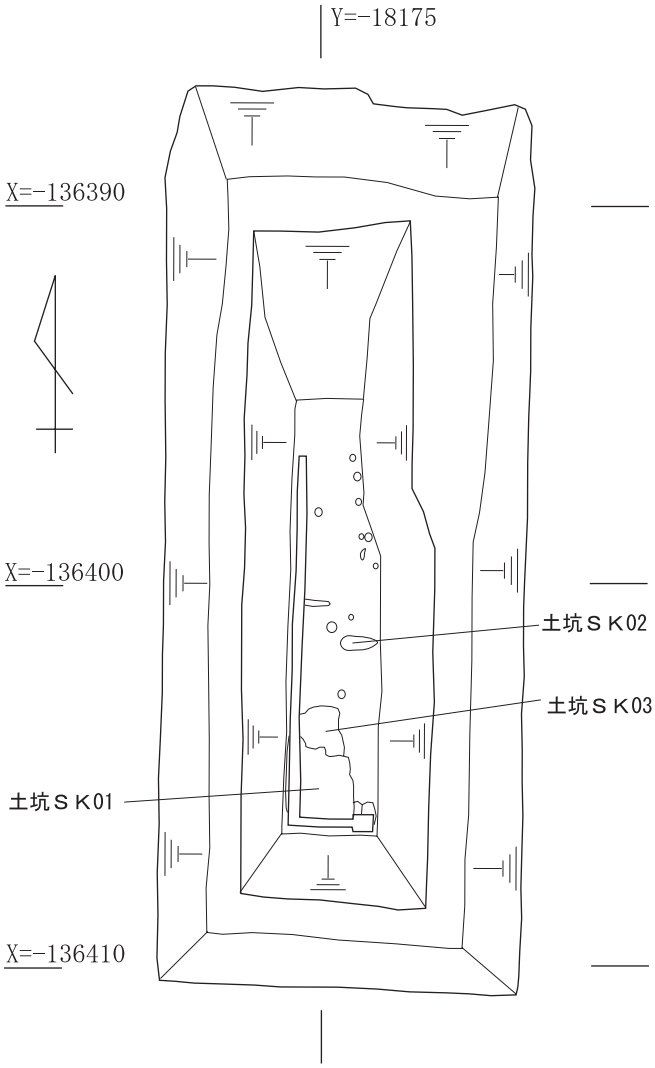
ピットＰ87　東西約0.9m、南北約0.7m、深さ約0.15mを測る小穴である。底部には平たい石が据えられていた。埋土からは瓦器椀の破片が出土した。

土坑ＳＫ89　トレンチ南東部で検出した直径約0.3m、深さ約0.1mを測る円形の土坑で、底部はすり鉢状を呈する。埋土から土師器の破片が出土した。

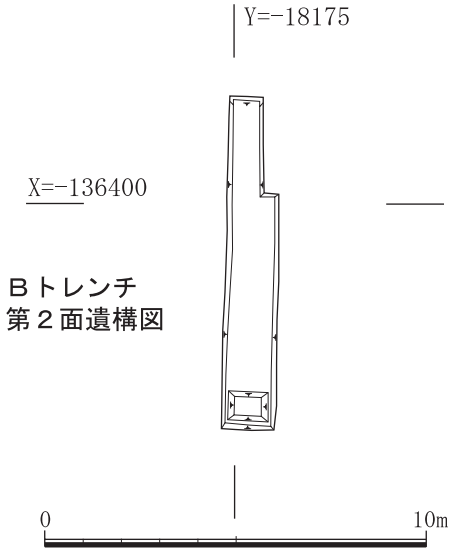
ピットＰ90　東西約0.3m、南北約0.2m、深さ約0.5mを測る楕円形を呈する小穴である。検出面より0.1m下げたところで平石が据えられ、その平石の下から15枚の完形の土師器小皿が重なった状況で出土した。何らかの儀礼がおこなわれたと考えられるが、詳細は不明である。時期は12世紀後半と推定される。埋土からはそのほかに土師器の破片が出土した。



第７図　Ａトレンチ第２遺構面
ピットＰ90平・断面図



Ｂトレンチ　第１面遺構図



Ｂトレンチ
第２面遺構図

第８図　Ｂトレンチ第１・２遺構面平面図

③第３遺構面

第２遺構面から約50cm下げた標高約24.7mで、縄文時代の遺構面を確認し調査を実施した。

検出した遺構は、落ち込み状の浅い土坑や杭跡と思われる小穴群を検出した。遺物は、器壁が厚く胎土が粗い縄文土器と思われる小片がごく微量であるが出土した。

ピットＰ95　直径約0.1m、深さ約0.12mを測る小穴である。埋土からの出土遺物はなかった。

土坑ＳＫ96　長径約0.6m、幅約0.2m、深さ0.05mを測る落ち込み状の土坑である。

土坑ＳＫ104　南北約1.9m、幅約1.1m、深さ約0.1mを測る土坑で、土坑底面で直径約0.3m、深さ約0.05mの土坑を検出した。埋土からは炭や焼土とともに、縄文土器と判断される土器小片が出土した。

２）Ｂトレンチ

過去の近接調査地である平成16年度の調査（第７次）の成果から、２面の遺構面が存在することが確認されている。第１面は中世（平安時代末～鎌倉時代）の遺構面、第２面は縄文時代の遺構面となる。第７次の調査の中世の遺構面では、条里制地割に由来するとみられる南北方向の坪境溝が確認されている。今回の調査地内にも坪境溝やそれに伴う遺構が検出できる可能性があった。

①第１遺構面

標高約25.4mで遺構を確認した。遺構は土坑や溝、ピットなどを確認したが遺

構の密度は希薄で、出土した遺物も少量であった。また、想定されていた条里制地割に関連する遺構は、今回のトレンチ内では確認できなかった。

土坑ＳＫ01　トレンチの南端部で検出した土坑である。確認できた規模は、東西約1.5m、南北約1.8m、深さ約0.15mを測る。遺物は、須恵器甕体部片、土師器皿、瓦器椀などが出土した。時期は12世紀後半に属するものと考えられる。

土坑ＳＫ02　トレンチ中央で検出した東西約0.9m、南北幅約0.4m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する土坑である。埋土から土師器の破片が出土した。

土坑ＳＫ03　トレンチの南端部で土坑ＳＫ01に切られる形で検出した土坑である。確認できた規模は、東西約１m、南北約1.3m、深さ約0.08mを測る。遺物の出土はなかった。

ピット群　直径約0.1 ～ 0.3mを測るピットを13基検出したが、ピット内からの遺物の出土はなかった。直径が小さい0.2m以下のものは、埋土が青灰色粘土であり、杭痕跡の可能性が考えられる。

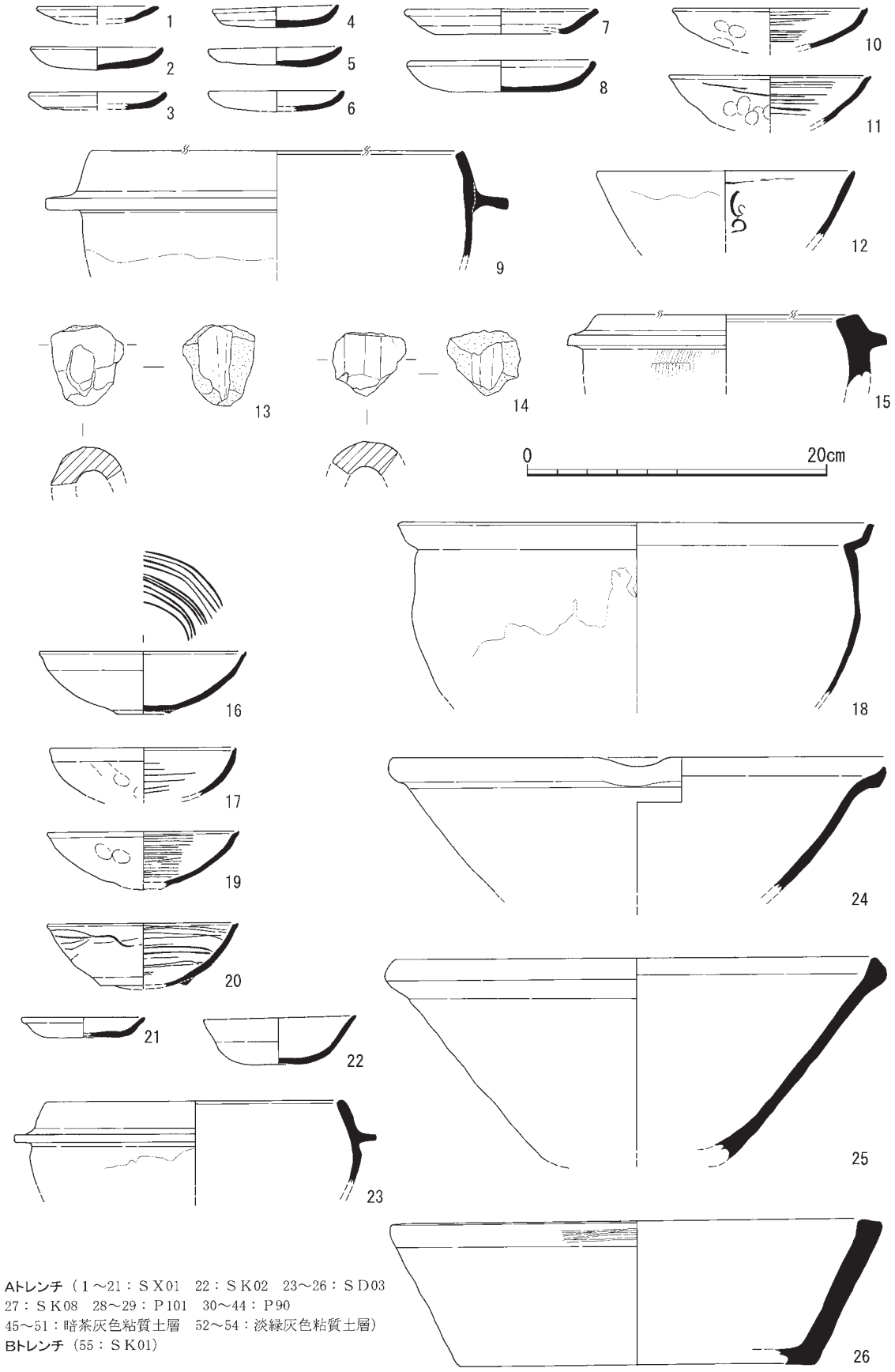
②第２遺構面

第１遺構面よりさらに30 ～ 40cm掘り下げ、平成７年度調査時の縄文時代の遺構検出面まで掘削し、遺構の精査をおこなったが、遺構は確認できず、縄文土器の出土も確認できなかった。さらに、南端部で約0.5m下層確認のため掘削をおこなったが、遺構・遺物は確認できなかった。

５．出土遺物（第９・10図）

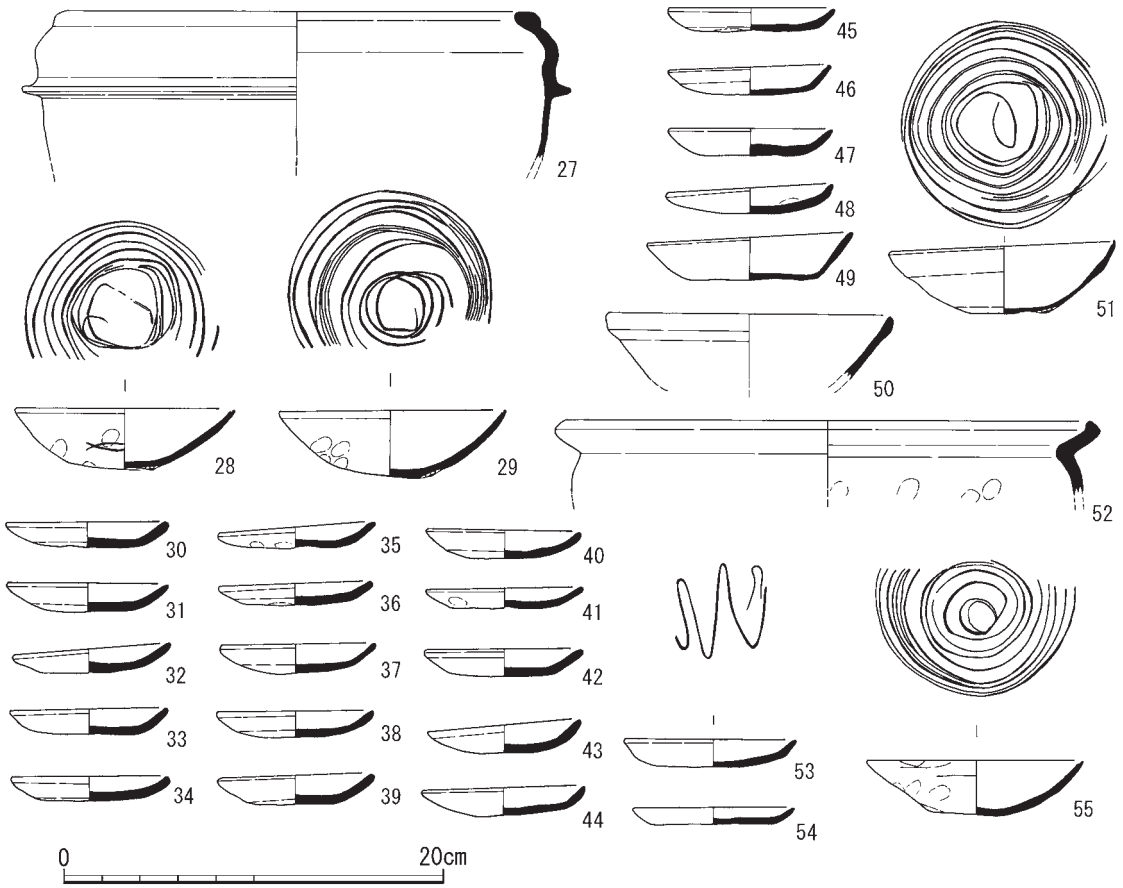
遺物は、中世の遺物が多く出土したが、実測可能な個体は少なかった。出土遺物の総量は整理用コンテナバットで６箱である。ここでは、各トレンチ、各遺構面ごとに報告する。

１～ 29は、Ａトレンチの第１遺構面で検出した遺構から出土した遺物である。１～ 21は土坑ＳＸ01から出土した。１～３・５・６は土師器の小皿で内外面ともにナデを施し、外面底部には指押えの痕跡がみられる。４は瓦器の小皿で、内外面ともにナデを施し、外面底部には指押え痕跡がある。器壁は摩耗していないが、暗文は認められない。７・８は土師器の皿で内外面ともにナデが施されている。９は土師質の羽釜で､大和産と思われる。外面上部には煤が付着している。10・11は瓦器の椀である。内面にはヘラミガキ、渦巻状の暗文が施されている。12は青磁の椀の口縁部で、内面に模様がみられる。13・14はフイゴの羽口の破片である。２点とも火を受けており、上部は赤色化、下部は黒色化または鉄分が付着している。15は滑石製の石鍋の破片である。外面には整形時の工具痕が残る。16 ～ 18は焼土坑ａから出土した遺物である。16･17は瓦器椀で、16の底部には貼り付け高台の痕跡が残っている。18は土師器の甕であり、外面口縁より下部に煤が付着している。19 ～ 21は、焼土坑ｂから出土した遺物である。19・20は瓦器の椀で、内面には渦巻状の暗文が施されている。外面底部には、貼り付け高台の痕跡がみられる。21は土師器の小皿である。22は、土坑ＳＫ02から出土した土師器の杯である。口縁部のナデが粗く、口縁が歪んでいる。23 ～ 26は溝ＳＤ03から出土した遺物である。23は土師質の羽釜である。外面には煤が付着している。24・25は東播系の須恵器の鉢で、24には注ぎ口がある。26は瓦質土器の火鉢の



Aトレンチ（1～21：ＳＸ01　22：ＳＫ02　23～26：ＳＤ03
27：ＳＫ08　28～29：Ｐ101　30～44：Ｐ90
45～51：暗茶灰色粘質土層　52～54：淡緑灰色粘質土層）
Bトレンチ（55：ＳＫ01）

第９図　出土遺物実測図（１）



第10図　出土遺物実測図（２）

破片と思われる。27は、土坑ＳＫ08から出土した土師質の羽釜の破片である。大和産のものと思われる。28・29はピットP101から出土した瓦器の椀である。内面には緻密なヘラミガキと渦巻状の暗文が施されている。外面底部には指押え痕跡と貼り付け高台の痕跡がみられる。

30 ～ 44は、第２遺構面のピットP90から出土した遺物である。30 ～ 44は土師器の小皿であり、残存率の高い破片について図化した。口径は8.5cm前後の小皿で内外面ともにナデが施され、外面底部には指押え痕跡が残る。

45 ～ 51は、第１遺構面の上層にある遺物包含層（第３図第11層の暗茶灰色粘質土）より出土した遺物である。45 ～ 48は土師器の小皿の破片である。49は土師器の杯である。50は白磁の椀の口縁部片である。51は瓦器の椀である。内面にはヘラミガキ、渦巻状の暗文が施されている。

52 ～ 54は、第２遺構面直上の第３図第17層の淡緑灰色粘質土層から出土した遺物である。52は土師器の甕の口縁部である。口縁は28.6cmを測る。53は瓦器の小皿である。内面底部に波状の暗文が施されている。54は土師器の小皿である。

55は、Ｂトレンチの土坑ＳＫ01から出土した瓦器椀である。内面にはヘラミガキ、渦巻状の暗文が施されている。外面底部に貼り付け高台の痕跡が残る。

６．まとめ

Ａトレンチでは、第１遺構面で検出した土坑ＳＸ01から、火を受けた土器や焼け土、炭、鉄滓、フイゴの羽口、石鍋などが出土した。どのような構造をもった施設であったか詳細は不明であるが、鍛冶関連の遺構の可能性が考えられる。このことから、集落内で小規模ながら鍛冶作業をおこなっていたことが想定される。第２面では中世と古墳時代の遺構が混在していたが、古墳時代の遺構は、遺物の出土がなく埋土の状況からをこの時期のものと判断した８基の土坑があるだけである。第２面の中世の遺構では、ピット90内に20枚の土師器皿が重なった状態で出土し、何らかの儀礼がおこなわれたと考えられる。第３面で検出した縄文時代の遺構は、落ち込みのような浅い土坑や杭跡と考えられる小穴群で、遺物は土器片がごく少量出土した。

Ｂトレンチでは、第１面で中世の遺構を検出した。しかしながら、今回の調査トレンチ内では条里区画に関連する遺構は検出できなかった。縄文時代となる第２面では遺構・遺物ともに確認できなかった。

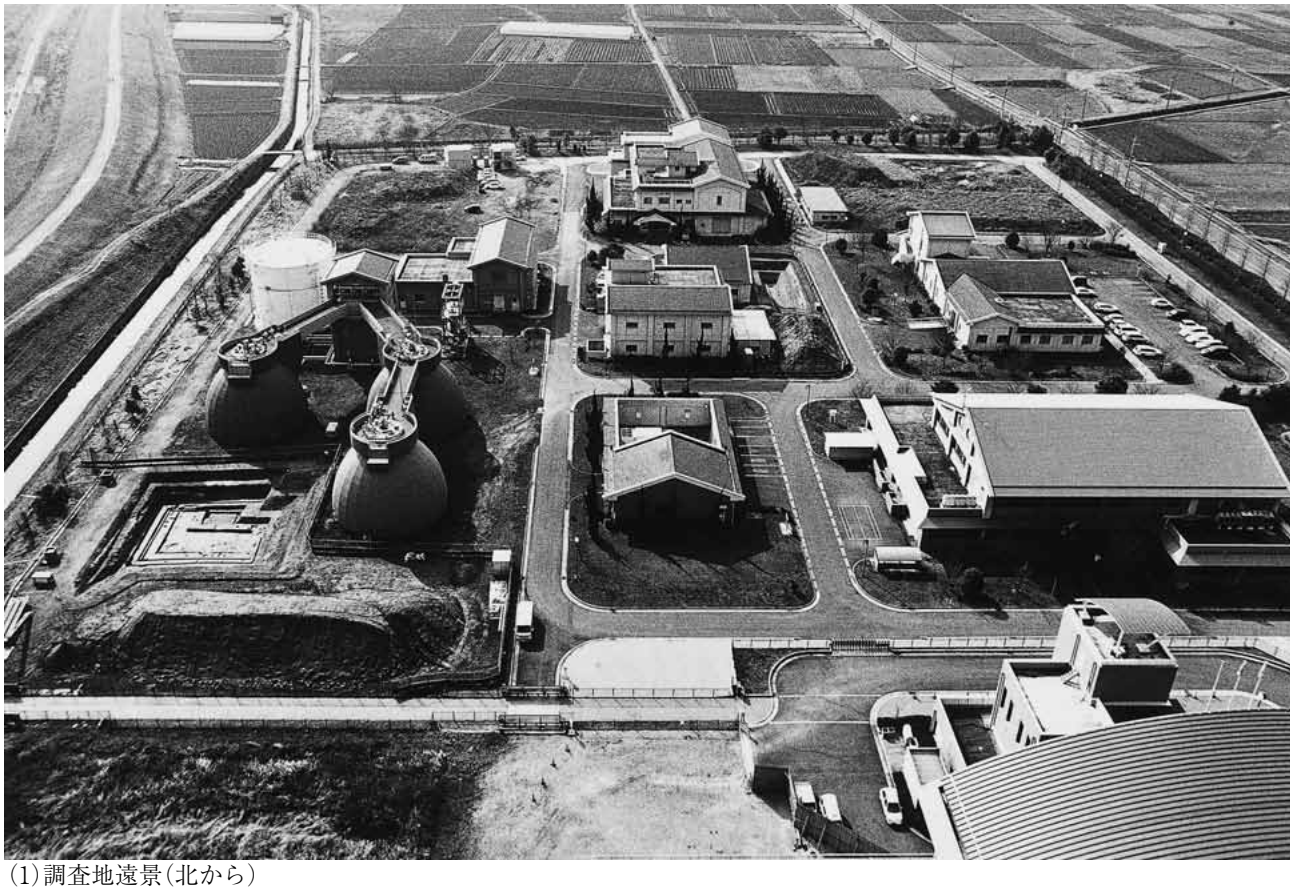
参考文献

河野一隆ほか「椋ノ木遺跡第５次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第105冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2002

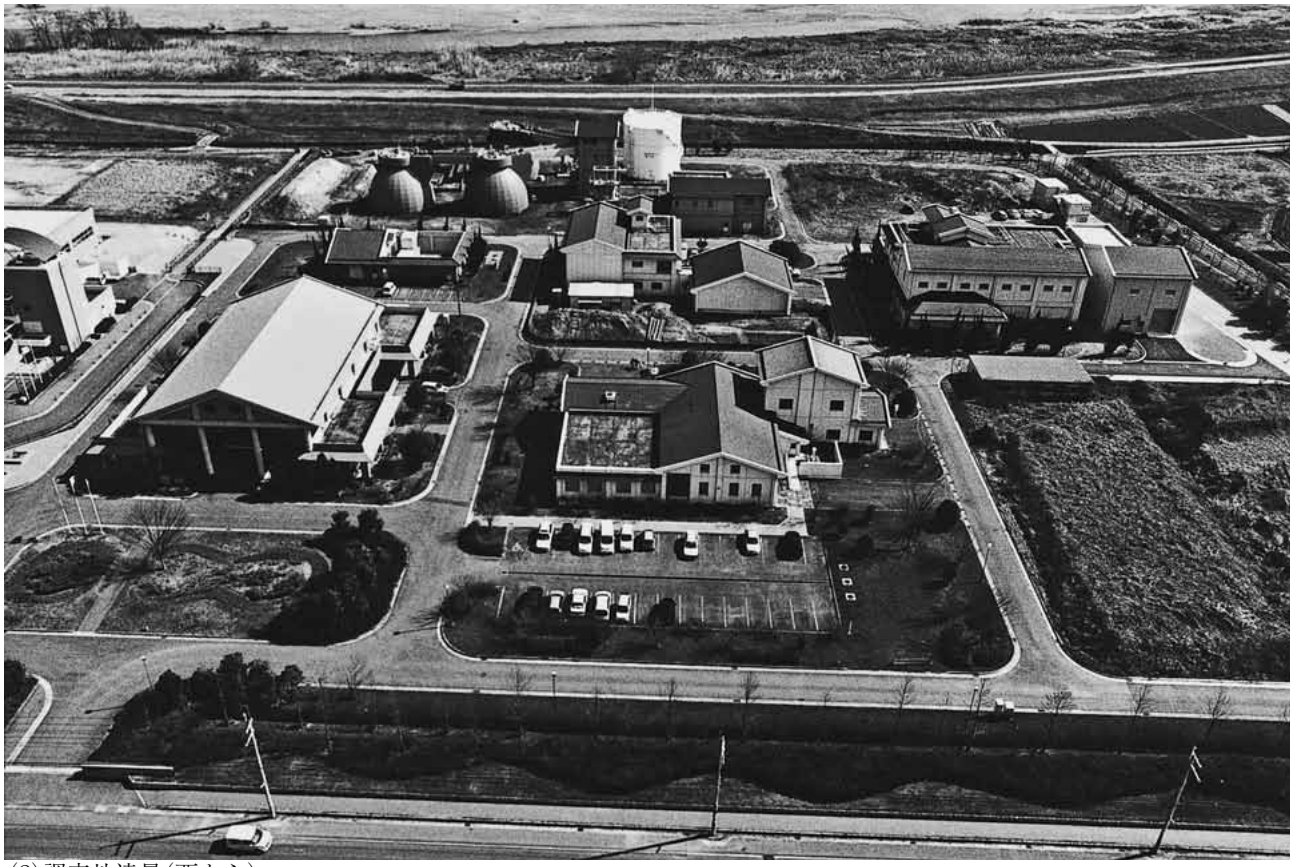
森島康雄「椋ノ木遺跡第６次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第110冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004

高野陽子「椋ノ木遺跡第７次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第115冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2005

図　　版



(1)調査地遠景(北から)



(2)調査地遠景(西から)

(1) Ａトレンチ遠景(北から)

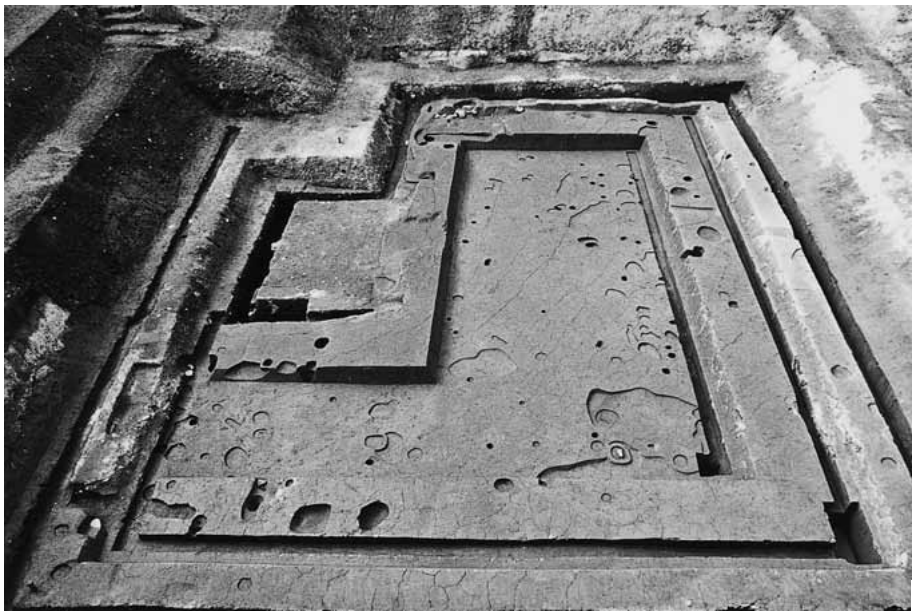
(2) Ｂトレンチ全景(左が北)

(1) Ａトレンチ調査前(北西から)

(2) Ａトレンチ重機掘削

(3) Ａトレンチ作業風景(南東から)

(1) Ａトレンチ第１遺構面(北から)

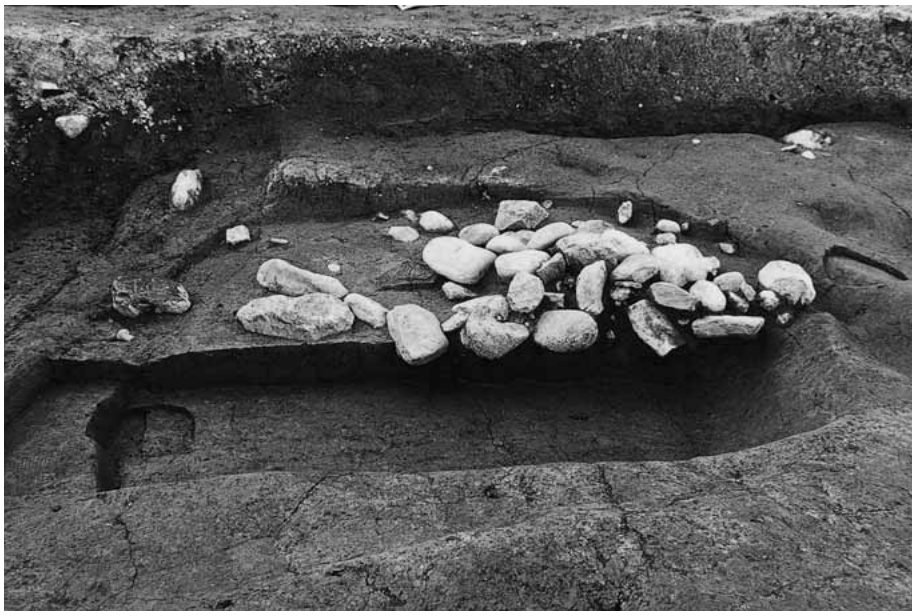


(2) Ａトレンチ第１遺構面(東から)

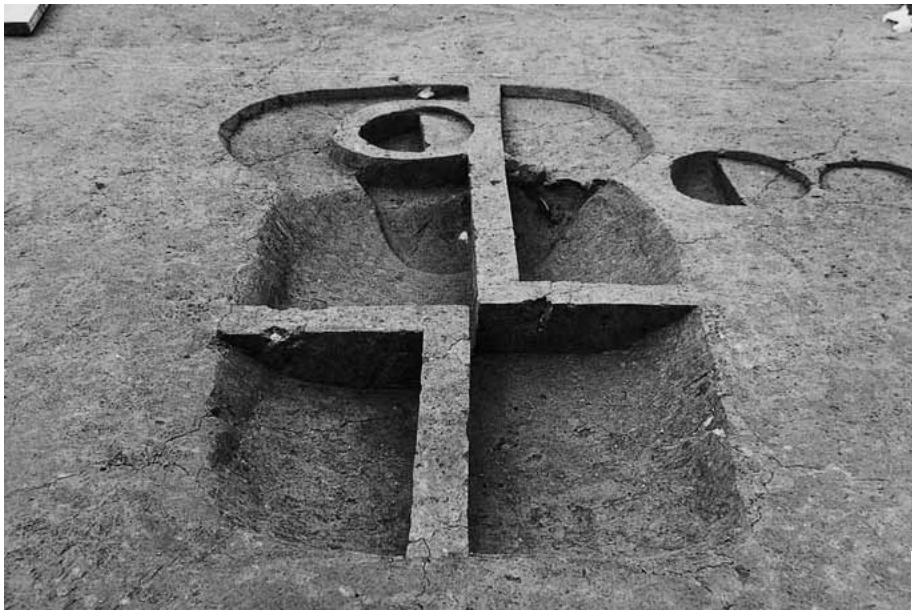
(3) Ａトレンチ第１遺構面
土坑ＳＸ01周辺(北から)

(1) Ａトレンチ第１遺構面
土坑ＳＸ01内焼土坑ａ・ｂ
検出状況(西から)

(2) Ａトレンチ第１遺構面
土坑ＳＸ01内焼土坑ａ・ｂ
完掘状況(西から)

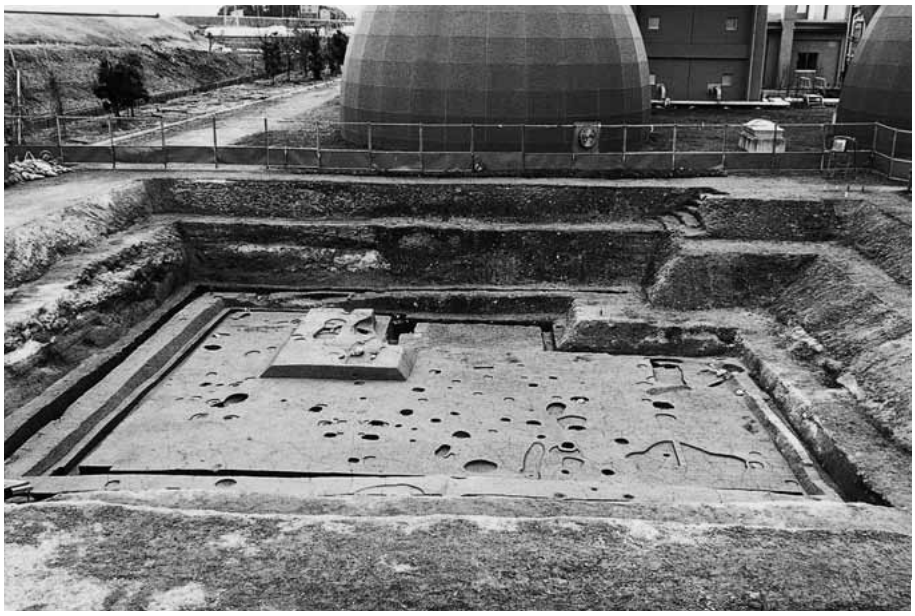


(3) Ａトレンチ第１遺構面
土坑ＳＫ02(東から)

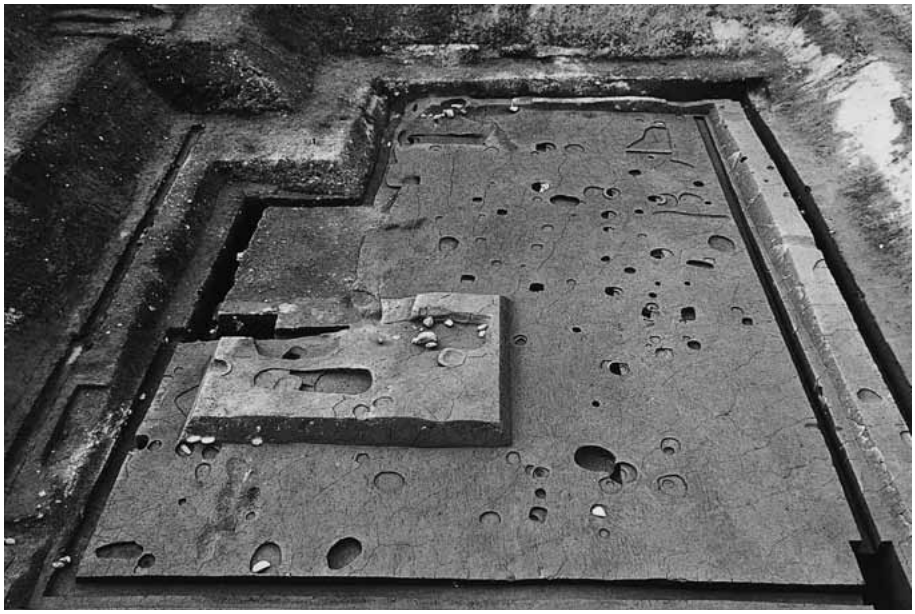


(1) Ａトレンチ第１遺構面
土坑ＳＫ04(東から)

(2) Ａトレンチ第１遺構面
ピットＰ101遺物出土状況
(西から)



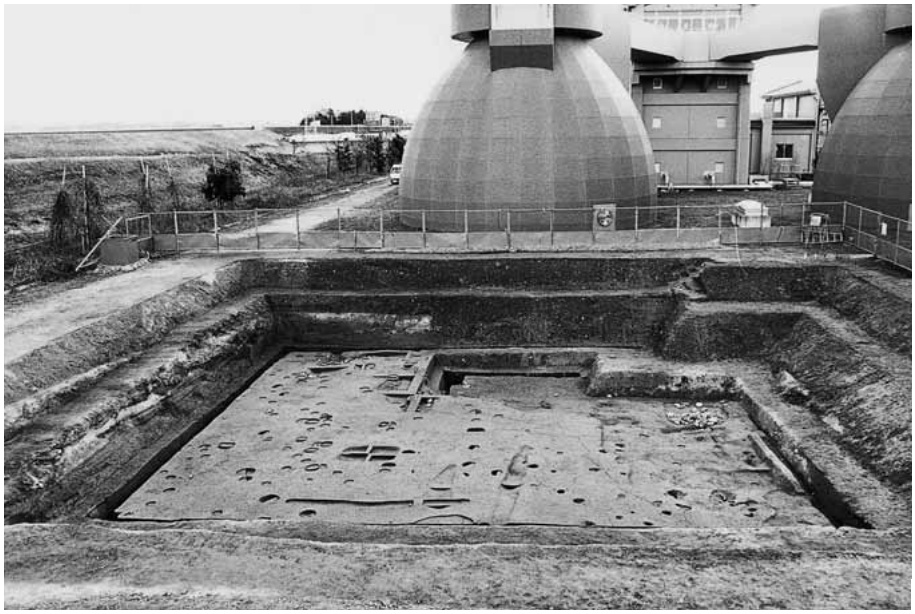
(3) Ａトレンチ第２遺構面(北から)



(1) Ａトレンチ第２遺構面（東から）

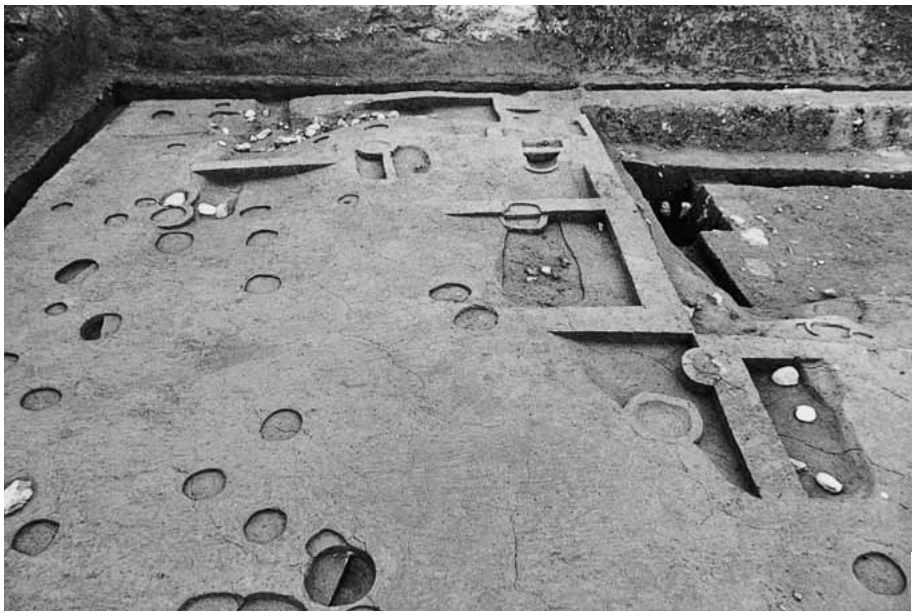
(2) Ａトレンチ第２遺構面
ピットＰ90検出状況（西から）

(3) Ａトレンチ第２遺構面
ピットＰ90遺物出土状況
（西から）



(1) Ａトレンチ第３遺構面(北から)

(2) Ａトレンチ第３遺構面(東から)

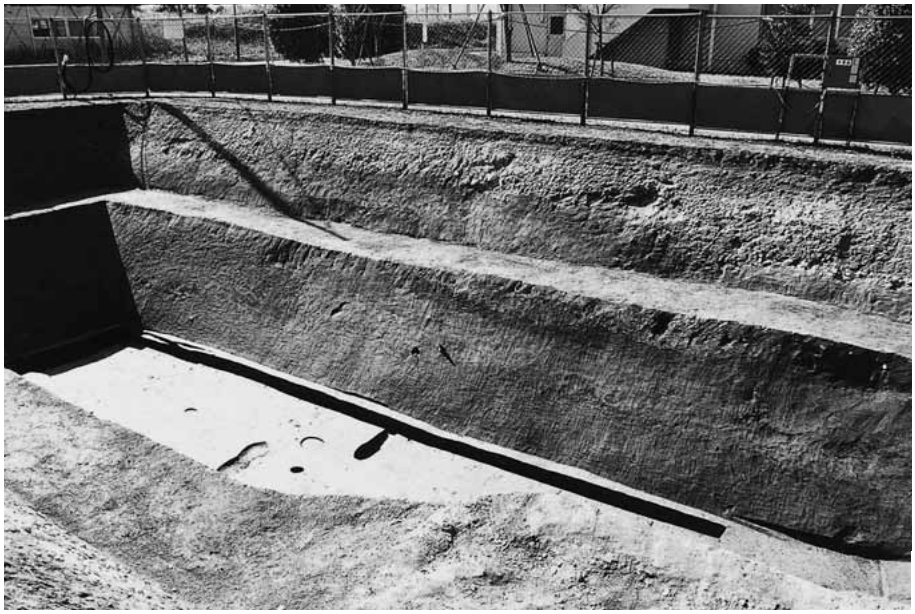


(3) Ａトレンチ東壁土層断面
(西から)

(1) Ｂトレンチ調査前（北西から）

(2) Ｂトレンチ重機掘削（南東から）

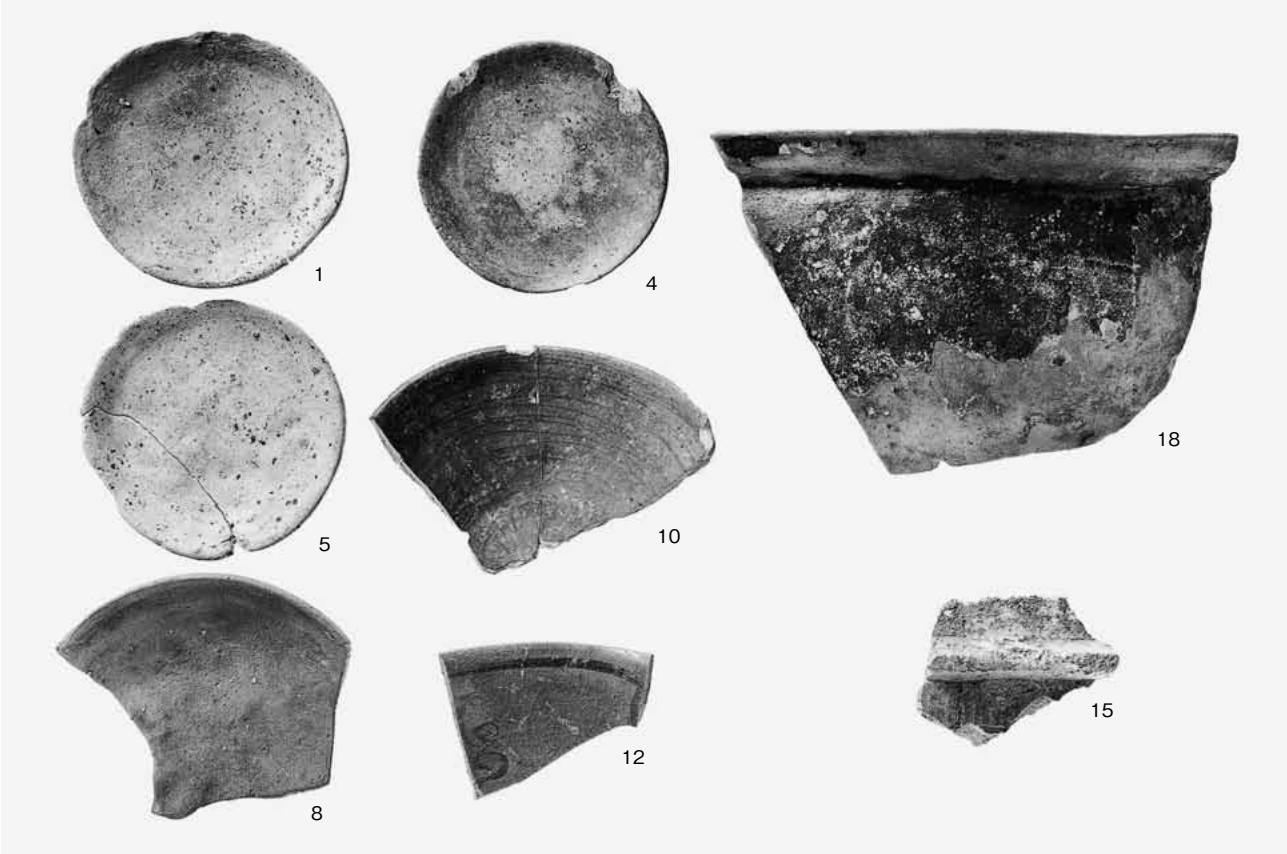
(3) Ｂトレンチ第１遺構面（北から）



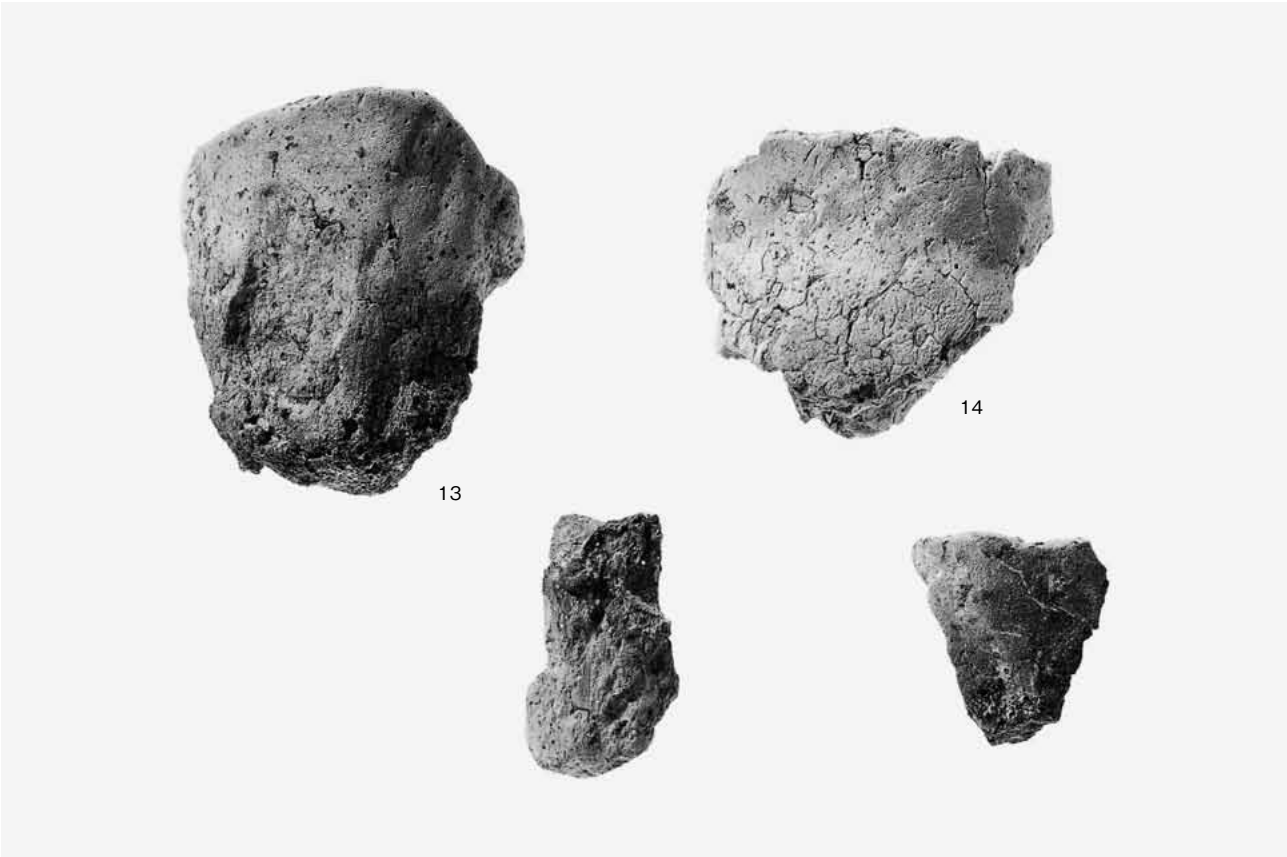
(1) Ｂトレンチ西壁土層断面
（北東から）

(2) Ｂトレンチ第２遺構面(北から)

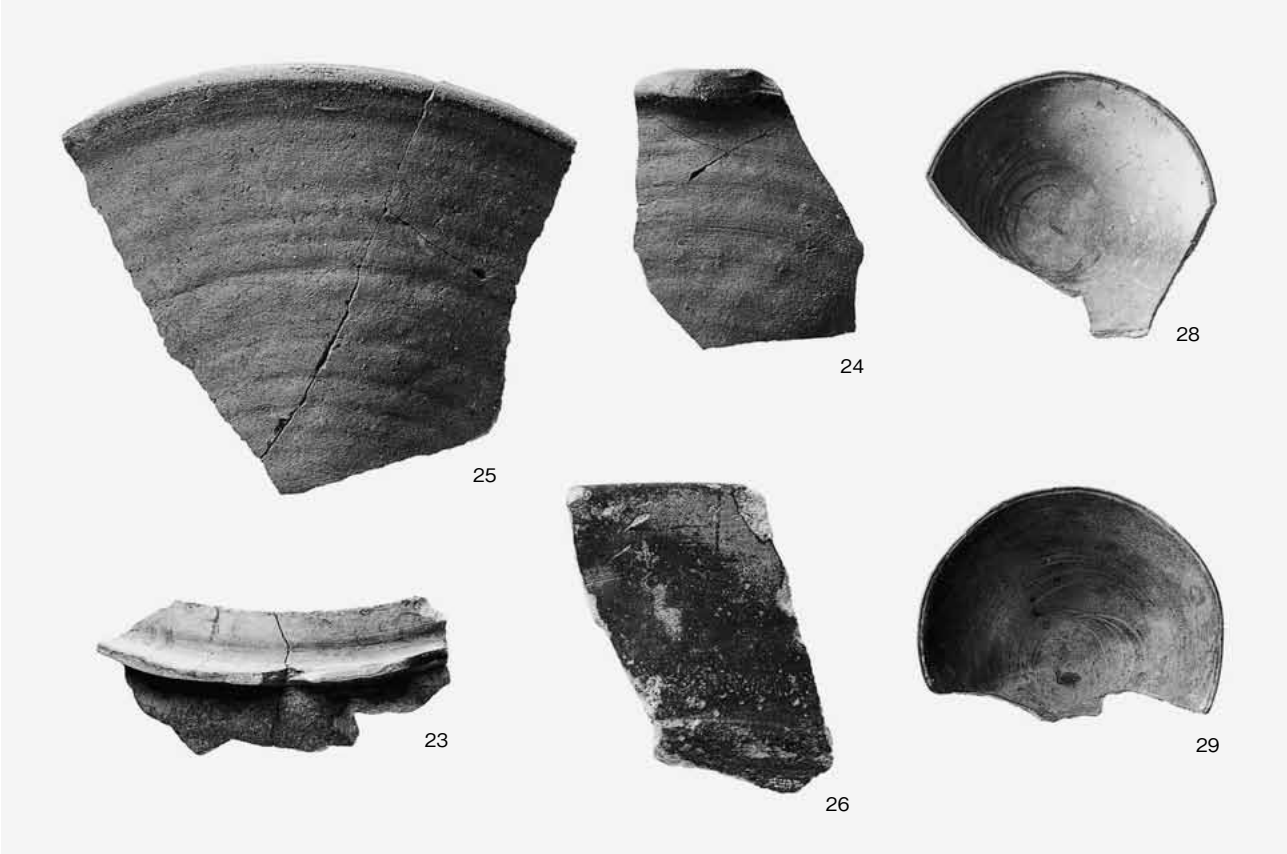
(3) Ｂトレンチ埋め戻し終了
（北から）



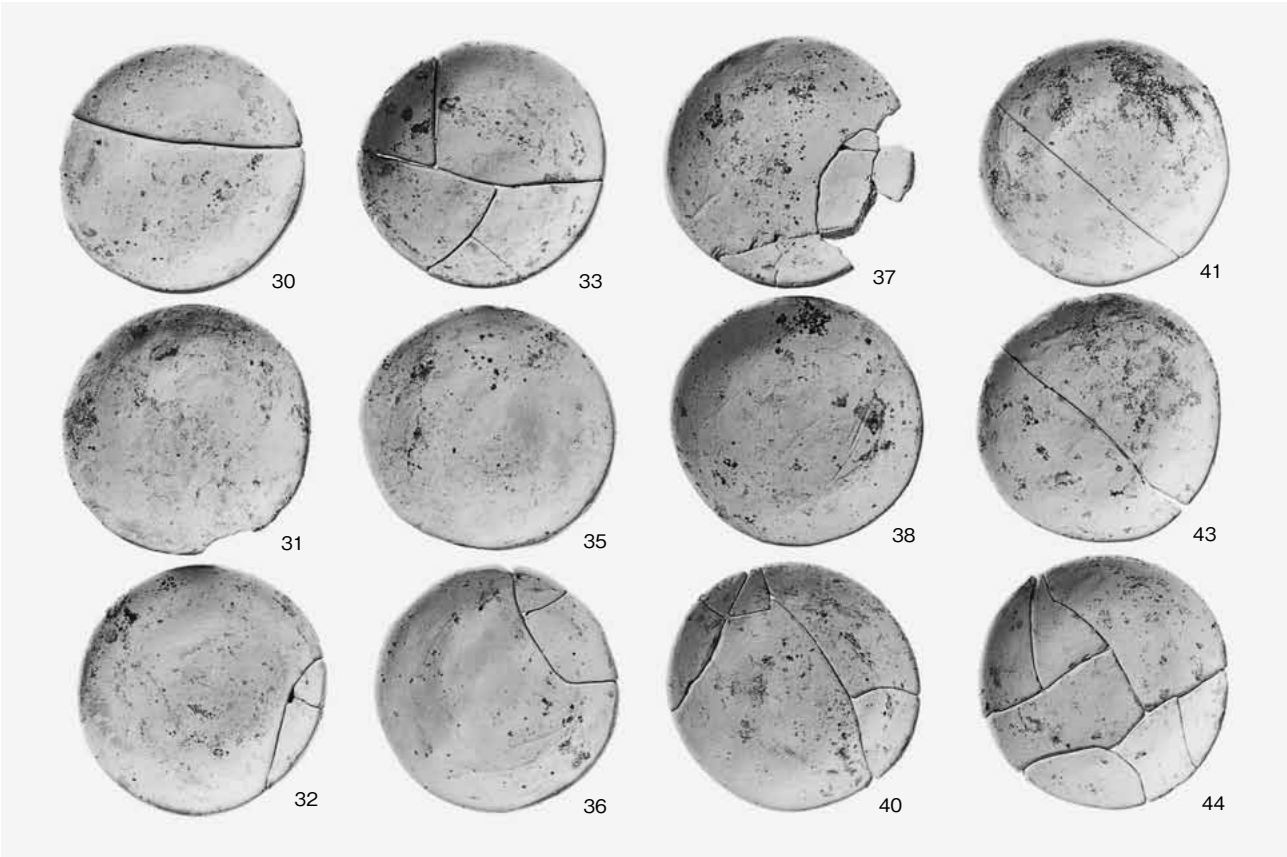
(1) Ａトレンチ土坑ＳＸ01出土遺物



(2) Ａトレンチ鍛冶関連遺物



(1) Ａトレンチ溝ＳＤ03出土遺物



(2) Ａトレンチピット Ｐ90出土遺物